

名寄市立大学・市立名寄短期大学

授業改善通信

第1号 (2007年3月発行)

目次

1	授業改善通信発行の背景	1
2	学生授業評価アンケート実施報告	3
3	本学授業の紹介 (小平洋子教授担当「基礎調理学演習」)	3
4	よりよい授業をめざして=第1回ピアレビュー報告=	5
5	他大学の授業改善の紹介	
	① 他大学の授業改善情報について思うこと	6
	② 名古屋大学版ティーチングティップス	7
	編集後記	8



1. 『授業改善通信』発行の背景

2004年4月1日、すべての国立大学は独立法人化され、国立大学法人となりました。大学運営システムを変えたことの影響は大学教育のみならず、教職員の研究・教育にも多大な変化をもたらしています。さらに公立大学にも独立法人化の波は押し寄せ、今や大学変革の波は全国的に急速な展開をみせています。この中で、「授業改善」が重要事項のひとつとして取り上げられているのは周知のとおりです。この流れにあって、本学は大学新設時より授業改善に取り組んできました。

「授業改善通信」発行の目的は2つあります。ひとつはその内容についての情報公開にあります。単に一方的に情報公開するだけでなく、情報公開することで多くの方から授業改善に関する意見をいただき、その意見を授業改善に活かしていきたいと考えています。通信は年1回の発行を予定していますが、今後、内容の充実を図っていきたくと思っています。第1号通信では本学授業改善委員会の設置の経緯、文部科学省の授業改善に関する考え方に関する情報、第1回ピアレビューの実施内容、そして本学教員による授業改善に関する工夫の紹介等を掲載します。

1. 授業改善委員会設置の経緯について

授業改善委員会(以下、本委員会という)は、文部科学省に提出した名寄市立大学設置趣意書にある「教員の資質の維持向上の方策」の項目の中で設置することが記されている。大学設置に関する多くの種々の業務を遂行する中で、本委員会が実質的に機能し始めたのは後期に入ってからである。本委員会の規程は11月8日に定められ、委員会は、次の3つの職務をもつ。

- ① 授業改善に関する他大学や関連機関からの情報を収集し教員に伝達する。
- ② 本学教員による授業改善の試みや、授業改善に関する研究成果を教員間で発表・討議する機会をもち授業の質を高める。
- ③ 本学FD委員会が学期末に実施する学生による授業評価のアンケートについて、FD委員会と連携した取り組みを行なう。

本委員会は看護学科・栄養学科・社会福祉学科・教養教育部・市立名寄短期大学児童学科の教員各1名で構成され、委員長が必要と認める者を委員として加えることができる。なお本委員会は、適宜名寄市立大学・市立名寄短期大学運営協議会内に設置されたFD委員会と連携し、運営にあたることになっている。名寄市立大学新設初年度、本委員会は次の業務に取り組んだ。

- ① 前期・後期末に学生授業評価を実施し、評価結果を出し、結果の活用をFD委員会に委ねた。
- ② 第1回ピアレビューを実施した。
- ③ 本委員会通信の発行

2. 文部科学省による「授業の質を高めるための具体的な取り組み状況」

文部科学省はホームページで授業の質を高める工夫をしている特徴ある大学を抽出し、紹介している。授業改善の具体的な内容の概要を次に示す。

- ① 授業期間等→ Semester制の採用。平成16年度現在、8割以上の大学が取り入れている。
- ② 少人数教育の実施→1クラス20人以下の授業を少人数授業とすると、実験・実習では366大学、ゼミでは560大学、卒論指導では529大学がこれを取り入れている。ほとんどの大学が、ゼミおよび卒論指導では少人数教育を実施していることがわかる。
- ③ シラバスの作成→平成16年度現在、約99%の大学が実施。
- ④ ティーチング・アシスタント (TA) の活用→平成16年度は総計約74000人がTAとして活用されている。なおTAとは学部学生等に対するチュータリング(助言)や実験、実習、演習等の教育補助業務(具体的には、演習のディスカッションリーダー、レポート・試験等の採点など)を行い、これに対する手当てを支給される大学院学生等を指す。
- ⑤ 学生による授業評価の実施→平成16年度までに、国立87大学(約100パーセント)、公立75大学(約97パーセント)、私立529大学(約97パーセント)、国公立全体で691大学(約97パーセント)において、学生による授業評価を実施。
- ⑥ 学生による授業評価の結果を改革に反映させる組織的な取り組み→平成16年度までに学生による授業評価を実施した大学のうち、授業評価の結果を改革に反映するための組織的取り組みが行われていると答えたのは、国立大学約59%、公立大学30%、私立大学約39%、国公立全体で285大学(約40%)となっている。学生による授業評価の具体的な実施例として、国立大学と私立大学2校を取り上げている。

1) 信州大学の事例

全学統一の調査項目で全授業科目(講義、演習、実験、実習及び体育実技の授業形態ごと)を対象にWEB(一部の学部はマークシート方式)を利用した授業評価を前期・後期ごとに実施した。共通教育科目では、学生の自由記述に対する対応を教員が回答し、任意でホームページ上(学内限定)に掲載した。

2) 兵庫医科大学の事例

各学年次において授業毎に担当教員別に学生に無記名でアンケートを行った(臨床実習については科単位)。その上位を自己点検・評価委員会で選出。教授会でベストティーチャー賞を決定し表彰した。ベストティーチャー賞受賞教員の講義をVTRで収録し、学内で供覧した。

- ⑦ 単位の上限設定→単位の過剰登録を防ぐため、1年間あるいは1学期間に履修登録できる単位の上限を設けている(いわゆる「キャップ制」)大学は年々増加しており、平成16年度現在、国公立429大学(約62パーセント)が履修科目登録の上限を設けている。
- ⑧ 厳格な成績評価の実施→シラバス等で授業方法・計画とともに成績評価基準を明示した上で、厳格な成績評価を行うことが求められているが、例えば、現在米国において一般に行われている成績評価方法であるGPA制度を導入している大学も見られる。GPA制度とは授業科目ごとの成績評価を、例えば5段階(A、B、C、D、E)で評価し、それぞれに対して、4・3・2・1・0のようにグレード・ポイントを付与し、この単位あたりの平均を出して、その一定水準を卒業等の要件とする制度をさす。GPA制度は進級や卒業判定、大学院入試の選抜基準として使用、学生に対する個別の学修指導に活用、奨学金や授業料免除対象者の選定基準として使用、大学院への早期入学や早期卒業、あるいは退学勧告の基準として使用する。

⑨ ファカルティ・ディベロップメントの実施

ファカルティ・ディベロップメントを実施している大学は、年々増加しており、平成16年度現在、534大学（約75パーセント）の大学が実施している。ファカルティ・ディベロップメント： 教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称である。具体的な例としては、新任教員のための研修会の開催、教員相互の授業参観の実施、センター等の設置などを挙げることができる。本学で実施したピアレビューは教員相互の授業参観の実施にあたる。

以上、授業改善に関する課題は山積みですが、全学で1000名にも満たない小規模大学であることのメリットを活かして、少人数教育の徹底、双方向的なやりとり、学生が理解でき、わかったという満足を得られるような授業の実現をめざしたいと思います。

2. 学生授業評価アンケート実施報告

1年前期・後期に開講された全ての科目について、授業改善委員会が学生授業評価アンケートの実施にあたりました。前期のアンケートでは、授業改善委員会が7月時点で未発足だったことから、実施時期が11月となりましたが、教職員・学生の協力により、貴重な意見を数多く集めることができました。なお、前期アンケートの回収率は78.8%、後期アンケートは87.0%（平成19年3月2日現在）です。今後も引き続き、学生授業評価アンケートを実施します。どの科目も自由記述が乏しい傾向にありますので、学生のみなさんの積極的な意見を願います。

なお学生授業評価アンケートにつきましては、本学FD委員会と連携し業務にあたっていますが、結果の活用につきましてはFD委員会が担当していることを申し添えます。

3. 本学授業の紹介

授業改善通信では、名寄市立大学および市立名寄短期大学で行なわれている授業内容について、順次公開していく予定です。第1回目は名寄市立大学保健福祉学部栄養学科、小平洋子教授担当の「基礎調理学実習」の紹介です。小平先生に執筆いただきました。

栄養学科の基礎調理学実習は、将来管理栄養士として栄養・健康教育の指導者になることを前提に、以下を目標に実習しています。

- ① 「おいしい食事づくり」ができる知識と調理技術を理解し、修得する。
 - ・食材の特性を高めるような調理操作(炊く、煮る、焼く、等)を学び、調理技術を向上させる。
 - ・主食・主菜・副菜の組み合わせを基本にした献立で、栄養・健康、安全面、嗜好面、経済を考慮したおいしい食事づくりを体験する。
 - ・基本的な料理の分量および調味を理論で学び、味わって確認する。
- ② 自主献立では、学生自身が地域や季節の食材を利用した献立作成、食材購入、調理を行い、応用展開する能力を養う。
- ③ 実習は班単位で行い、リーダーシップや責任感、協力性を身につける。

基礎調理学実習の中で、学生が最も生き生きと実習を行うのは自主献立である。実習の流れは、基本の実習後に自主献立を取り入れ、楽しみながら美味しく作り①や③が達成できるようにした。

自主献立の「地場産品使用の弁当ー主食・主菜・副菜3・1・2ー」では、図1のように弁当の設計図を書き、班

別に調理する(写真1)。名寄産のアスパラガス、レタスを使用し、ミニトマト、にんじん、きゅうりは北海道産である。さくらんぼで季節感を表現している。

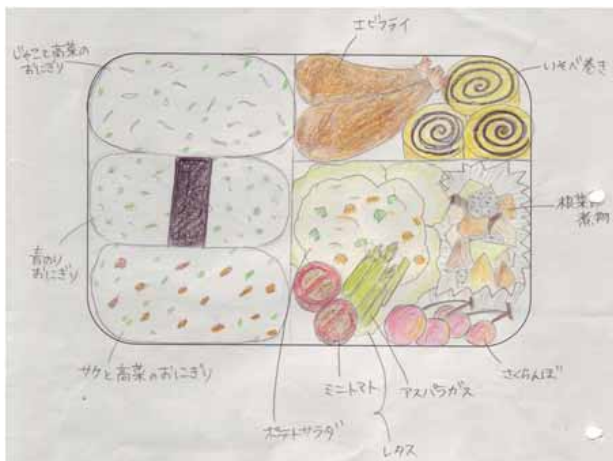


図1 地場産品使用の弁当設計図

写真1 地場産品使用の弁当 出来あがり

実習の最終回は、自主献立によるバイキング形式の行事食。2つの班が組になり、主食・主菜・副菜・汁物・デザートを一品ずつ調理し、全員で試食。学生の食べたい料理が主になったため、エネルギー過剰になったが、楽しく、コミュニケーションを取りながらの試食になりました(写真2)。



実習時間のオーバー、担当者作成献立にいくつか不備があったことが今後の課題です。学生の授業評価も参考に、次年度の実習に生かしたいと考えています。

写真2 バイキング形式による行事食



名寄市立大学
市立名寄短期大学
構内

4 よろよい授業



をめぐって = 第1回ピアレビュー報告 =

授業改善委員会主催の第1回ピアレビューが、2007年1月15日（月）、名寄市立大学新館121教室で実施されました。目的は「教員同士が相互に授業を公開し、授業法の改善を目指して話し合う中で教員の授業能力を高めていく」ことにあります。以下、ピアレビューの様子について、その概略をお伝えします。

初回の公開授業科目は教養教育部 塚本智宏教授の「教育原理」であり、当日は28名の教員が授業参観に参加し、授業後の討論にも16名ほどの参加があった。

公開授業のテーマは「授業作りとその評価」で、教職課程の学生に対して、高校世界史の授業づくりをどのように工夫するのかという内容を含んだものだった。

授業後の話し合いでは、まず塚本教授から、「これまでこの授業は講義形式で行ってきたが、今回、授業改善を意識して、可能な限りビジュアルな教材を活用すること、受講生には歴史の事実資料に触れさせること、そして授業に全員が参加するには作業が有効と考え、ある作業を通して歴史の面白さをわかってもらうための工夫を行った。具体的には伝言ゲームを伝説作りに絡ませて取り入れた。学生は熱心に授業に取り組んだが反省点もある。全員を授業に参加させようと作業と討論を実施したが、討論するのは難しかった。また今回の授業は“授業評価”もテーマだったので、学生には事前に授業づくりのレポートを課して学習させていた。しかし時間不足のため、教員が学生の授業に対するコメントをフィードバックできなかった」といったコメントがあった。また「板書をしようとしたが、スクリーンが中央に降りているためできなかった。スクリーンを使用しながら板書できるような教室の設備が必要だ」「教室の広さの割にはホワイトボードのサイズが小さすぎるのではないか」といった施設設備上の課題も浮き彫りになった。

その後の討論では、参加した教員から「学生は授業に集中していたようである。参観者がいることで緊張はしていたように思うが」「授業の構成や資料の使い方は効果的で、私自身の授業改善のヒントになった。学生も歴史の面白さや楽しさが理解できたという感じを受けたが、学生の反応を確認したほうがよいと思う」「学生は、歴史は暗記するものと考えていたようだが、この授業によって歴史は解釈するものだという考えに変わってきているように感じた」など、たくさんの意見が出された。



また塚本教授は授業ごと実施している学生の授業評価に関する教員のフィードバックを重視しているが、「今回は学生にフィードバックできなかったが、返せばコメントの書き方も変わるのも事実だ」「学生に返すときに、どのタイミングで教員がコメントをするのが難しい。学生の意見を待たずに教員がついコメントしたり、ゼミが講義になってしまうこともある」など、理想になかなか添えない現実もあらわになった。

その後、学生を授業にひきつけるための工夫について、参加教員が自分自身の経験話を伝えた。その内容の一部を次に紹介する。

「学生をひきつけるために教員が学生に直接質問する場面で、答えがなかなか返ってこないことがある。それに対しては、授業中に質問について、ひとつは事前に用意しておく」「答えられる学生にまず答えてもらって、授業の場を盛り上げることもできるが、学生は正解をしななければならないとか、答えられなかったら恥ずかしいと考え、答えないこともある。これに対して、学生の答え

に無駄な答えはないという考え方をもち、どんな答でも受け入れること、そしてそれを学生にきちんと返すことが大切だ」等の意見があった。

このほかにも「授業開始時に、一人ずつ簡単な話しをしてもらう。声を出してもらうことでコミュニケーションがとれ、学生の状況を知ることできる」「学生が持った考えを学生本人に板書させて、その一つ一つにコメントをする」「教員はまず学生の顔を覚える。そして教員から積極的に学生に声をかける。すると質問をしても学生は何か答えてくれる」「教員は学生の評価を次の授業に生かすように心がける」「授業の準備は授業の成果に結びつく。教員は周到に授業準備をすることが大事」「学生を退屈させないために、学生が興味を持ち関心をひく内容を授業に取り込むと効果的だ。そのために、教員は学生がどんなことに興味関心をもっているのかを知る努力をし、選択した教材を授業に活用する努力が必要だ」など、白熱した議論が展開された。

参加者の実感としては、お互いが不慣れな初回のピアレビューにしては有意義な情報および意見交換はできたと思われまふ。いずれにしても塚本教授をはじめとして、ピアレビューに加わっていただいた教員の皆様のご協力により、第1回目を無事に終えることができました。平成19年度以降のピアレビューについてもすでに「公開授業を担当したい」とお話をいただいている先生も数人いらっしゃいます。ピアレビューが継続され、本学の授業改善が促進されることを期待したいと思ひます。関係各位の皆様、ありがとうございました。

5. 他大学の授業改善

① 他大学の授業改善情報について思うこと

インターネットの検索エンジンに「大学」「授業改善」「ファカルティ・ディベロップメント」などを入れて検索を行うと、たくさんヒットするというを体験しました。一昔前であれば、まず「授業改善」について書かれた書籍を購入し、それを読んで紹介するというのが一般的なやりかたであったかと思われまふが、今はインターネットで他大学の情報を簡単に得ることができてしまう時代となりました。

もともと、その量は膨大で、重要で参考になる順に並んでいるわけでもありませんし、すべてを読み尽くすことも出来ません。はじめは浅はかにも1番上の項目から順次読んで知り得た内容を万遍なくお伝えしようと考えたのですが、だんだん、あちこち、標題の面白そうなものだけを飛び飛びに読むということになってしまいました。ですから、情報は少し偏っているかもしれません。

それによりまふと、日本の大学では研究よりも教育についての評価や改善が遅れをとっており、現在、授業評価や授業改善への要請が高まっているという考えもあるのだそうです。そこで、学生の声を聞くためにアンケートをとり、その結果を分析してホームページに載せるという大学も増えてきています。調査方法をマークシート方式からウェブ方式に切り替えようとしている大学、授業改善にかかわる視点・論点を輪番で教員が執筆して意識を高めている大学なども見うけられました。

授業は、これまで以上に、例えば「知的な興味のわくものにする」「わかりやすくする」「双方向的なものにする」ことが必要であり、そのためには板書、プレゼンテーション、教材、資料に工夫を凝らしたり、ときどき身近な問題や事例も取り入れた参加型の授業を試みたりすることが求められているようでした。レポートや試験には添削や模範解答などのフィードバックが望まれ、教員には人間性も期待されていることがわかりました。

今回、インターネット上の記述からは、授業改善はトップ・ダウンよりもボトム・アップで行い、自らの意思に基づいて改善のための実践を重ね、ピア・レビューなども行いながら、よりよい授業にしていくことを楽しめると、なお良いということが理解できました。

最後に、ひとつだけ気になったのは、インターネット上では情報が圧倒的に教員や大学側から発信されたもので占められており、学生側からのものを見つけることができなかったということです。したがって、これからの「授業改善」では、これからの「授業」と同様に、できるだけ「双方向」でなされるようにしていくことも、一つの検討しなければならぬ課題であるように思われました。

② 名古屋大学版ティーチングティップス

『授業改善』と言葉から想像すると、良くない講義を良い講義にすると考えがちです。確かにこれも間違いではありませんが、かなり一面的な視点です。この視点で『授業改善』を実施しようとする、講義方法の良し悪しが評価されているように勘違いしてしまいます。しかし、これでは本当の意味での授業改善は一向に進みません。『授業改善』は、学生の理解度がより向上する講義のやり方にしていくと考えるのが妥当と思われます。一昔前の大学の講義では講義内容を理解するために自分で勉強しなさいというスタンスで多々やられていました。しかし、大学全入時代を向かえて、すべての学生がこの方式での講義で理解が進むわけではなくなっています。そこで講義のやり方をこれまでと少しずつ変えていく必要があるといえます。ただし、大学教員の多くが講義方法について研修を受けてきているわけではありません。また、科目も千差万別ですし、講義方法も十人十色です。これが正しいという王道はありません。そのため、授業の進め方のベースとなる部分の一般化を行って、それらを講義に役立てるといふ試みがされています。今回はその一例ですが、名古屋大学の授業改善の取り組みとしてティーチングティップス (<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/tips010/index.html>) を取り上げたいと思います。

世界の多くの大学が教育のQA (quality assurance, 質保証) に力を注いでいます。QA とは具体的には、①カリキュラム、②教授法、③評価法の質を総合的に高める作業と言えます。これらの成果が「ティーチングティップス」です。Tips (秘訣・助言・ヒント・こつ) は、欧米の大学では新任大学教員の授業ハンドブックとして作成されています。名古屋大学でも自分の大学に合ったTips 集を集めているわけです。名古屋大学では、このTips を「授業のマニュアル」や「教授道の指南書」として示しているわけではありません。Tips を自分の講義に少し利用することで、講義を展開する自分も、さらにその講義を受ける学生にとってもフラストレーション少ない講義ができるとしています。あくまで講義の手助けとなるTips ということです。これをやればよい授業となるという押し付けではなく、自分が参考になる事例などを利用してみてはどうかというものです。

Tips は、科目内容構成を設計する段階 (これがシラバス作成に生きてきます) から、実際に講義を実施し、学生の成績評価をし、自分の授業について反省する段階までに注意すべきことや改善のためのヒントなどが簡潔にまとめてあります。いわゆる15回の講義(半期であれば)を展開するためのPlan-Do-Seeのヒント集といえます。さらにこの中で講義の具体例などを示したコラム、シラバスの実例や雛形、注意項目チェックリストなどが利用できるようになっており、教員が授業改善を少しでも手軽に行えるように配慮されています。常に教員からの情報を収集し、名古屋大学版Tips を成長させ、多くの教員で講義のためのTips を共有しようという姿勢が表れています。

このTips は名古屋大学の教員だけでなく、他の大学教員でも講義展開に役立つ部分が多々あります。もちろん、本学でもこのようなTips が今後必要になっていくかもしれませんが、まずは他大学のこのような取り組みを自分に合う形で利用してみるのもいいと思います。詳細を参考にしてみたい方は、上記に示したホームページアドレスにアクセスしてみてください。なお、これをより一般化して書籍になったものに、『成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集—』(ISBN4-472-30257-8, ¥1,470) がありますので、ご一読してみるのもいいと思います。





名寄市立大学は2006年4月に新設されました。保健福祉学部看護学科、栄養学科、社会福祉学科、そして既設の市立名寄短期大学児童学科で構成される日本最北の公立大学です。

地域に根ざした教育を展開していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

授業改善委員会へのご感想・ご意見をお待ちしています。各学科委員あてにお伝え下さい。

【編集後記】

名寄市立大学は平成18年4月に新設された大学であり、大学自身が膨大な業務を抱える中、授業改善委員会の実質的な活動は前期後半に入ってからとなりました。その経緯については「授業改善通信発行の背景」で記したとおりです。本学FD委員会との連携で実施された学生授業評価アンケートの整理は大変なものでしたが、授業改善委員各位の熱意で無事業務を終えることができました。授業改善委員会の中心業務は「授業改善」にありますが、授業改善を達成するために、本通信では3つのコラムを用意しました。

ひとつは本学の授業紹介です。第1回目は栄養学科教授、小平洋子先生ご担当の「基礎調理学演習」を紹介しました。地域と密着した教育を展開するために、地場産品使用の弁当をテーマに学生は授業を受けました。授業風景からも、充実した授業であったことがうかがわれます。2つ目は第1回ピアレビューの開催です。授業改善委員による不慣れた司会ではありましたが、担当の教養教育部教授、塚本智宏先生の用意周到な授業セッティングに支えられ、参加者からも活発な意見をいただき、実りの多い授業内容でした。最後に、視点を外に向ける意味で他大学の授業改善情報を参考にし、可能なものを取り入れていきたいと思っています。第1号通信では「名古屋大学版ティーチングティップス」を取り上げました。

本通信の内容も盛りだくさんとなりましたが、成果のひとつひとつを次の授業改善につなげていければと思っています。
(授業改善委員一同)



発行日：平成19年3月31日

編集・発行：名寄市立大学・市立名寄短期大学授業改善委員会

委員：池田正子（看護学科）・石川貴彦（教養教育部）

糸田尚史（児童学科）・小山充道（社会福祉学科）

西村直道（栄養学科）

以上 5名